小泉八雲の異文化理解

高瀬彰典

Akinori TAKASE

The Crosscultural understanding of Lafcadio Hearn

［キーワード：脱西洋、霊界、大海、教育、西洋文明、明治維新、日本研究、芸術論］

（1）時代精神

ハーンは1850年に生まれ、19世紀末の時代に活躍した作家である。彼は19歳から40歳まで、マルティニークでの二年間を除けば、ほとんどアメリカで新聞記者として生計を立てていた。当時は世界大戦の挫折もまだなく、無限の経済的富と科学の発展が期待され、世界中の富がアメリカに集まり、様々な発明発見でユートピアを地上に実現しようと意気込んでいた時代であった。極東の島国日本はようやく明治維新で世界に国を開き、近代国家への道を歩もうとしていた頃であった。アメリカでは世界一周の旅が話題になり、紀行作家は世界の各地から見聞録をレポートし、大衆は未知の国々の異国情緒を熱狂的に歓迎した。産業革命以後の科学の進歩は、人類に無限の進歩とユートピアを約束するかのように、陸路や海路や空路の発達を促し、世界各地への移動が容易になり、望み通りの探訪旅行が可能になった。このような時代精神の影響を受けて、ハーンも自分自身の移動による外界の変化で自分の内界を変え、新たな可能性を絶えず求め続けた。それは自己の可能性の探求であると同時に、自己実現を異文化に求めようというロマン主義的熱情と異郷に対する哲学的で文学的な探究とが、複雑に入り混じった彼独特の幻想的想念の世界を創り上げた。彼は創作や詩的霊感に行き詰まると、無気力になる自分を鼓舞するかのように、場所を変えて空間を移動することで、新局面を打ち出そうという求道者的な異文化探訪の姿勢を終生一貫してとり続けていた。ハーンの未知の空間への移動は、西洋文明社会から脱することによって得られる精神的冒険を意味し、さらに従来の文学素材や手法とは違った異郷を好んで取材し、彼は異文化空間に独自の文学世界を模索したのである。

多くのジャーナリストや作家が、世界各地の辺境へ赴き紀行文や記事を書いた。そして、読者も日常性からの解放を求めて、見知らぬ異郷の異国情緒に浸ることに好奇心や関心を持っていた。ハーンは19世紀末のアメリカのこのような時代精神を一身に帯びていたが、さらに、父方のケルト的な漂泊する吟遊詩人の要素と母方のギリシア的な神話や異郷への憧れを併せ持っていた。しかし、アイルランドでの両親の離婚と大叔母の破産に始まる親族の冷たい仕打ちから、深い心のトラウマに苦しみ、その後の艱難辛苦の人生体験の中で、西洋白人社会に対する反発や不信をますます募らせた結果、彼は複雑な気質の作家となった。すなわち、大叔母の利己的な都合によって、非人間的で劣悪な環境の寄宿学校で厳しいキリスト教教育を強制されて牧師になることを求められたこと、在学中の遊戯の事故で片目を失明し人生に大きな障害が生じたこと、また、無分別な投資による大叔母の破産のために正式な教育を最後まで受けられなかったことなどが、彼のキリスト教嫌いを生み、艱難辛苦に耐えざるを得ない彼の波乱の人生行路を決定づけた。しかし、彼は逆境の中にありながら、図書館通いで独学の勉強を続け、強度に近視の隻眼にもかかわらず、膨大な量の読書を果たし文学研究に献身した。欧米の読者が知らない異郷の世界を、独自の文体で異国情緒豊かに美しく表現して紹介することが彼の仕事となった。そして、未知の異文化に取材して独自の視点と文体で表現することが、漂泊する吟遊詩人のようなハーンの魂を鼓舞した。時代が求め読者の欲求に適合した故に、彼の優れた異文化探訪の一連の作品群が生み出されたのである。

死ぬまで気の向くまま、世界各地を永遠に彷徨うのが自分の運命だと自覚していたハーンは、生来、現状に安住できず、満たされない魂の遍歴を続けるロマン主義者であった。30歳近くになってようやく記者として安定した地位を確立したが、彼は尚も心の充実を求めて各地を永遠にさまようような吟遊詩人的願望を抱いていた。彼は安定した仕事を辞めてでも、自分の希望する探求を実行に移して思うように好きなところを彷徨い、常に自らをリスクに追い込むかのように、極限的な土地と人との出会いに自らのアイデンティティを求めて異郷の異文化を探訪した。

新聞記者の安定した職を得た後でも、非日常的な変化を求めて放浪を繰り返したハーンは、生来のロマン主義的な気質から遠くはるかな空間に惹かれながら、イギリス、アメリカ、日本などの各地で異文化を体験し、19

世紀末の科学技術や経済の発展と世紀末的退廃という時代背景の中で活動を続けた作家であり、多くの複雑な要素を内面に凝縮した人物であった。彼の著作は他の追随を許さない彼独自の異郷探訪と異文化理解の世界を示しており、読者に未知の領域を伝える独特の味わいの文学である。ハーンは日本では小泉八雲の名で怪談の作者としてのみ一般に知られているが、アメリカ時代からの波瀾万丈の人生と風変わりな彼の性癖を吟味し、膨大な著作、書簡、講義録などを丹念に調べれば、異郷を好む異文化探訪の作家としての漂泊の生涯と、文学芸術に深い造詣を有する吟遊詩人的な魂の全体像が明らかになる。

ハーンの著作は独特の味わい深い文体と鋭敏な感性によって、日本文化への透徹した洞察力を示した芸術作品である。当時、多くの紀行作家が活躍して、世界旅行による異国情緒の報告がもてはやされたが、時代の流れの試練に耐えて生き残った者はほとんどなく、単なる興味本位の現地レポートは時間とともにその存在理由を失ったのである。しかし、ハーンの作品は単なる事実を報告する旅行記でなく、吟遊詩人的な特質を有する希有な作家の芸術作品として生き残っている。ハーンのような数奇な生涯の作家が、様々な異文化の先端にまで探訪して記した作品に対する正当な評価は困難なものである。この複雑な気質を有する作家の独自の業績に対する評価は、日本のみならず欧米でも賛否両論に分かれ、熱狂的に高い評価と存在さえ無視するような両極端の傾向が混在している。

(2) 異文化探訪

ハーンの異文化探訪への傾倒は、両親の離婚による母子生別が原点であった。その後の人生の艱難辛苦の逆境をむしろ生きる糧として、また永遠の母への思慕を楽園や異郷を求める漂泊の魂に昇華して、学校の正規の教育に頼らず、現実社会の現場に即した文学研究や社会勉強を彼は独学で成し遂げた。非情な父親のアイルランド人の血筋である西洋を憎み、ギリシア人の母親の血筋を非西洋と捉えて、東洋的なものや異文化を心の故郷とした。したがって、ハーンが背負った不幸な生い立ちは、必然的に彼の人生をさすらいの旅路にした。彼の放浪のエネルギーは、見果てぬロマン主義的情熱を生み出し、異文化探訪の人生への積極的な姿勢と脱西洋の思想を彼に植え付けた。

西洋人にしては背が低く風采の上がらぬハーンは、16歳の時に友人との遊戯中、ロープの結び目が左眼にあたり片目を失明していた。彼は醜く潰れた左眼を過敏に気にして、決して正面から写真を撮らせなかった。残った右目も強度の近視のため、激しい勉学による酷使の結果、眼鏡もかけられないほど異様に大きく飛び出していた。この風貌に対する強烈な劣等感が彼を白人社会から遠ざけ、アメリカに永住させることをさらに難しくした。来日して後、晩年に至ってもなお、ハーンは自分の左眼の醜い傷痕を酷く気にしていたという。無意識に手を常に潰れた左眼にあてていた。このように、幼少年期の不幸な生い立ちと苦労が身にしみて、彼はともすれば猜疑心を抱き被害妄想に陥りやすくなり、左目失明以後は必要以上に自分の容姿に強い劣等意識を抱いていた。過敏な神経のハーンは、対人関係で人と打ち解けて付き合うのに用心深く、気にいった人との付き合いを求めるのには熱心であったが、突然明確な理由もなしに友人と絶縁するという激しい気性の持ち主であった。また、記者として名声を得た後でさえ突然、彼は日常生活の圧迫から逃れるように各地を当てもなく放浪したり、カリブ海のマルティニーク島に赴いて未知の土地の風俗を調べたりすることを生業にしていたが、最後には西洋社会から遠く離れて、極東の島国日本へ渡り日本に帰化して永住するという人生行路を選んだ。

このように、ハーンは魂の拠り所を求めて、アイルランド、イギリス、アメリカの各地を彷徨い、さらに西洋から東洋へ漂泊して、吟遊詩人的感性を持ち続けて未知の土地に異国情緒を求め、生活に密着した取材と執筆態度によって異文化理解に新たな足跡を残した人物である。父親の出身地であるアイルランドでは肉親との縁薄く、彼はさまざまな苦難の末、渡米を決意する。母親の生まれ故郷のギリシアはごく小さいときの淡い記憶しかなく、二度と会えない母親の面影と重なって幻の国となった。ハーンはその後、生まれ故郷のギリシアの島の替わりを求めるかのように、終生、島と海に深い憧憬の念を抱き、ニューオーリンズではグランド島や西インド諸島のマルティニーク島を訪れ、現地に取材して作品の執筆に専念した。旅行記作家やルポルタージュ作家と言われる程、実に多くの地方を訪れて取材したハーンのアメリカ時代は、記者の仕事と文学研究の毎日であったが、彼はアメリカに同化し定住する気にもなれなかった。ハーンはジャーナリズムから生まれた作家であり、彼の作品の多くは芸術的創作であると同時に、当時の時代の風潮を反映した異文化探訪の記録でもある。19世紀末のアメリカの楽観的エネルギーと道徳的退廃に溢れた広大な土地と南部の閉鎖性に見られる地域性、すなわち、シンシナティとニューオーリンズ、自分の不幸な生い立ちが背負ったヨーロッパでの屈折した幼少年期、ギリシア、アイルランド、イングランド、フランスでの光と闇、このような様々な各地を遍歴するうちに、土地と人の結びつきの中で歓喜と絶望の体験をして、孤独で繊細な彼の感性が出逢ったものは、複雑な作用を心に働きかけてハーンという稀有で詩的な異文化探訪の作家を誕生させたのである。

また、ハーンの異文化探訪は自己探究と自己実現の旅であり、永遠の母性像を求めての見知らぬ異郷の土地への漂泊であった。それは現実にはどの女性にも分有されているが、十分には実現され得ない永遠の母性像であり、常に追い求めながら現実には捉えられないものである。この理想と現実の二律背反の矛盾的対立が彼の漂泊の人生を特徴づけている。ハーンの自己探究の中で永遠の母

性としての理想郷を求める心が、異文化へ傾倒する彼の人生行路を形成した。親族との縁が薄く、幼少期より疎外されて孤独の環境の中で育ったハーンは、どの土地にも人にも安住できず、世界の各地に理想郷を求めて放浪したのである。

異文化や異郷が彼の最も心引かれる研究テーマとなったことは、彼の不幸な生い立ちと無関係でない。ハーンの異郷への傾倒には、自らの魂の渇きを癒そうとするような精神的必然性を感じさせるものがある。不幸な生い立ちと幼少年期の心の深い傷は、弱いものや小さな虫への同情の念を植付け、彼を人の心の痛みのよく分かる人物に育てた。異文化や異郷を探訪するハーンは、意識のフロンティアを常に追い求めることによって、精神の安定を得ようとした。意識のフロンティアを求め続けた彼は、さらに、異界を求めて亡霊や霊界への飽くなき関心を抱き、人間社会の光と闇の背後に潜む名もなき魑魅魍魎にも深い関心を抱いた。異文化を求めて脱西洋の領域を探求し、辺境の人間の極致的な営みに対する賞賛の傾向を強め、西洋から隔絶した極地としての異郷、すなわち、熱帯のマルティニーク島への探訪に意欲を示し現地への長期取材を敢行した後、ついに、彼は極東の島国日本に渡るに至った。彼の不幸な生い立ちと苦難の幼少年期、どん底生活の青年時代、このような辛酸を舐め尽くすような運命の試練が、宿命的な人生の陰りや人間の負の力をハーンに痛いほど感じさせた。想像を絶するような逆境に打ち勝つべく、彼はひたすら努力し、何があっても一途に文学研究と創作への希望をあきらめなかった。このような過酷な運命の連鎖が彼を複雑な感性の人間にした。常に強迫観念と被害妄想に苦しめられて、彼は抑えがたい激情と猜疑心に駆られ、自分を取り巻く環境に安住できず、自分を追い詰める日常性から逃げ出し、異文化、異郷、異界という非日常性に新たな可能性を追い求めたのである。

『ハーパーズ・マガジン』の美術編集長パットンから、日本取材旅行の意志打診を受けたハーンは、日本の美術、文学、神話、宗教に関する興味を今まで以上に深めていた。日本に行けば、マルティニーク島で取材した作品よりも優れた本が書けるという自信を深めたハーンの熱意に、パットンも彼の日本行きに全面的に協力した。今まで日本について書かれた多くの著書とは全く異なった視点で、論文体を避けて新しい著述方法で考え、作品内容に新たな生気と色彩を持たせて、読者に異文化の生きた感覚を与えたいというのがハーンの日本取材の抱負であった。新たな事実を発見するのではなく、自分自身の個人的体験に基づいた独自の観点から、読者が正に日本にいるかのような印象を与えるために、庶民の生活の中に入り込んで無名の人々の感情を描き、さらに一般の日本人の思考様式で欧米の読者に考えさせるような作品を書くことがハーンの目的であった。

ハーンはパットンに向かって日本での取材計画と執筆予定の書物の内容について、明確に具体的題目を示して説明している。主要なものは次のような項目である。[1]

「第一印象、気象と景色、日本の自然の詩的要因」
「異文化」
「教育制度、こどもの生活、こどもの遊技など」
「家庭生活と宗教」
「寺院の儀式や礼拝」
「新奇な伝説と迷信」
「日本の女性」
「古い民謡」
「珍しい言語習慣」
「日本の政治的軍事的組織」

異文化を直観的に把握する能力に優れ、日本に関する知識や洞察力が的確であったことが、来日前の彼の取材計画の精緻な意図に伺われる。主観的感情に溺れやすいロマンチスト、脱西洋の漂泊者、日本を熱狂的に賛美し日本に帰化した西洋の奇人、偏屈で一刻者の夢想者などの表現は、ハーンを誹謗する言葉として使用され、従来から奇妙な偏見と独断による評価が、実際よりも彼を矮小化してきた。反キリスト教を標榜し西洋に背を向けて日本人になったハーンは、西洋社会から見れば奇人変人の裏切り者扱いであった。彼の日本研究における異文化への洞察力や精神的円熟の境地は全く看過されてきた。正規の教育を受けずに、全くの独学であった彼のディレッタント的側面は、狭量な専門家や学者の批判の的となり、業績に対する正当な歴史的評価を全く無視する傾向すらあった。ハーンの描いた日本像は幻想的であり、単なる熱狂的な言葉の羅列にすぎず、冷静な事実の記述に基づいた学者的な論考に欠けると保守的なアカデミズムから批判を受けてきた。しかし、本来、彼が意図したものは西洋の学問至上主義的な立場からは一線を画すものであった。人間の包括的考察者として、また、異文化の柔軟な理解者として、さらに、袋小路に行き詰まった西洋文明の悪弊に対する救済者として、苛酷な生存競争や近代産業主義の汚点から解放された楽園を各地に探訪してその文化的位相を模索し、ハーンは極東の日本の世界に幻想のような理想郷を垣間見て、西洋の価値観とは隔絶したものの真実性を捉え、その幽玄なる美質を優れた想像力によって読み解き表現しようとした。さらに、光の世界の裏側に潜む闇の存在様式としての異界、霊界へも深い探究心を抱き、各地に不可思議な伝承、神秘的な伝説、風変わりな逸話、奇妙な風習などを取材して作品化することに努めた。

そして、彼は現地に取材するというジャーナリスト的な創作態度を確立して後、ついに、40歳にして極東の島国日本にやって来た。このような放浪の日々の果てに、終焉の地となる日本に定住し、19世紀の半ばに生まれた異文化探訪の異色の作家ハーンは、54歳で日本で日本人として生涯を閉じたのである。彼は波瀾万丈の旅路の終焉の地として日本を選んだ。型にはまらない柔軟な視点で、近代化を急ぐ明治日本の姿を彼は鮮やかに描き出し、今まで注目されることの少なかった極東の島国を

西洋社会に繊細な文学的表現を駆使して紹介した。このような特異な経歴と優れた才能の作家が来日し、世界に日本を紹介する優れた一連の著作を発表したことで日本は大きな恩恵を受けた。一連の日本論の著作において逆説的に、ハーンが見出した日本の魂に日本人が惹かれ教えられたのである。ハーンは西洋至上主義に捕らわれない自由な視野と繊細な感受性で日本を捉え、日本人も気づかずに通り過ぎてしまうような様々な日常的庶民生活の貴重な記録を多くの著作に書き残したのである。

(3) 異界、霊界

ハーンの異文化探訪のもう一つの原点は、異界、霊界との出会いであった。異界や霊界への柔軟な思考が、従来の固定観念から彼を解放し、彼を独自の取材方法の異文化探訪者に育てた。このような不可思議な世界へのロマン主義的な熱中が、不可視なものを畏敬の念で見つめ、現状よりも遙か彼方の未知の土地を思慕の念で辿り行く彼の生涯を決定づけた。異郷の異文化に対するハーンの傾倒ぶりは、幼少年期の霊界へのトラウマ的体験に基づいている。ハーンはまだ幼い時に母親と父親の両方から縁を切られ、大叔母の重苦しい屋敷で孤独な幼少年時代の日々を送った。彼は4歳で母親と生別し、その記憶もはっきりせず、美しい浅黒い肌と大きな茶色の瞳が幻のように断片的に残っているだけであった。薄情な父親にも彼は5回程会っただけである。姿を消した母親は再婚し子供を産み、再婚相手から前夫との間に生んだ子供と会うことを禁止されていたため、父方の親戚に厄介になっていたハーンと弟の養育を拒んだが、晩年には精神を病み、10年間入院した後、59歳で亡くなった。また、後に成人してアメリカで農場主をしていた弟とは、日本へ発つ直前に文通があっただけで、彼には生涯一度として実際に会う機会はなかった。このように肉親の縁の薄かったハーンには、母親の記憶もほとんどなかったが、母親への思慕の念は非常に強いものがあった。

母親に対する父親の冷たい仕打ちによって、幼くして生別したハーンは、父への根深い反発と母への強い思慕の念をトラウマのように心に刻み込むに至った。ハーンの満たされぬ魂とその後の英米での筆舌に尽くせぬ艱難辛苦の生活体験は、北方のアイルランドの白人社会を本能的に憎み、脱西洋の思いを強め、南方のギリシアのラテン世界や東洋世界の異文化を賛美し、永遠の母性への憧憬を追い求める生涯の原動力になった。後年、彼は著書の中で、人間は成長し知識を身につけるにつれて、絶対的な存在を無限の母の愛として認識するようになると論じ、このような考え方を生む想像力の根源は西洋的というよりも東洋的なものに違いないと断じている。人類が進化すればするほど、神の概念はすべての聖なるものを変容する希望として、より女性的なものにならざるをえないとし、次のように述べている。

「こうした考えは、どんなに信仰の薄い者にも、ありとあらゆる人間の経験のなかで母の愛ほど神に近いものはない ― 母の愛ほど神聖の名に価するものはない、ということを想い起こさずにはいない。この惨めな小さな星の表皮の上で思想のか弱い生命がはぐくまれ、生きながらえることができたのも、母の愛があったればこそであろう。人類の頭脳のうちにより高尚な感情が花咲く力を得るようになったのも、その無上無私の愛があったからであろう ― 見えざる霊界を信ずる高尚な心がよびさまされたのも、母の愛の助けがあったればこそであろう。」(2)

強者としての白人の父の非情を憎み反感を募らせる一方で、弱者たるギリシア人の母の悲運に同情し、ギリシアや東洋を理想化し異国情緒を想像力で膨らませ、すべて自分の中の優れた能力は母からの賜物と考えた。人を愛する心や悪を憎み真理を探求し審美感を抱く能力は、全て母親から与えられたものと彼は信じ、異界や霊界への関心を独自の立場から深化させるようになった。

子供のいない大叔母ブレナンは、当初自分の全ての遺産を相続させようとして、幼いハーンを引き取り世話をした。しかし、一人読書することの多かったハーンは、周囲に馴染まず、ギリシア神話やケルト伝説の世界、お伽噺や昔話に強く惹きこまれていた。さらに、過敏なハーンが暗闇を怖がったりひどく幽霊を恐れていたので、そのようなことがないようにと厳格な大叔母の指示によって、5歳程で一人暗い寝室に鍵をかけて寝かされため、毎晩、彼は幽霊や妖怪の悪夢や幻覚に襲われた。過敏で臆病な性格を直すためという理由で、無理矢理に暗い部屋に閉じこめられて寝かされたために、感受性の鋭かったハーンは、激しく亡霊や幽霊に怯え悩まされた。大叔母の陰鬱な大きな屋敷の重苦しい雰囲気の中で、幼い多感なハーンは親子の絆を断ち切られて、肉親の愛情もなく一人暗い部屋に閉じこめられて眠り、恐怖の中で亡霊や幽霊と遭遇したのである。さらに屋敷に出入りしていた禁欲的なカズン・ジェーンが厳しい神の罰を説き、ハーンにキリスト教に対する恐れや亡霊を信じる契機を与えた。大叔母の屋敷の中では、まだ幼いハーンは名前で呼ばれず、単に「子供」と呼ばれていたという。周囲との意思疎通を欠き、両親から見放され、誰からも愛されていない状況の中で、彼は大人の世界に対する恐怖心を抱くようになった。このような幼少期の苛酷な体験は、冷徹な現実よりも夢幻の時空間に浮遊するハーンを育て、かって恐怖の対象であった亡霊や幽霊は、むしろ異界や魔界に非常な興味を持たせるに至った。肉親の愛に縁の薄い不幸な生い立ちの中で、周囲から疎外されて日常性は現実感を失い、彼は幻想や幻覚を見て不可思議な超自然世界に魅了され、恐怖であったはずの霊界や異界に傾倒し親近感を覚えていた。さらに、成長するにつれて、ハーンはむしろ亡霊や幽霊に虚偽のない純粋な霊魂や情念の存在を感じるようになった。また、大叔母やカズン・ジェーンの標榜するキリスト教に反発すると同時に、彼

は霊界や異界の神に一層の近親感を覚え信仰のようなものを感じるようになった。天涯孤独なハーンにとって、かって恐怖の対象であった亡霊や幽霊こそが唯一最も親愛なる存在となったのである。

大叔母の屋敷に出入りしていたカズン・ジェーンという女性は、キリスト教教義の呪縛に取り付かれた悲哀の人物として幼いハーンの脳裏に焼き付いていた。[3] 彼女は天国よりも地獄の恐怖を幼いハーンの心に呪術的恐怖の言葉で植え付け、すでに亡霊や幽霊体験によって異界への関心を深めていた彼をさらに魔物の世界へ誘うことになった。すなわち、霊的体験による異界への関心は、彼女との出会いによってさらに駆り立てられ、キリスト教の神よりは魔性の存在、悪魔、亡霊、魑魅魍魎の世界、異端の神々、暗黒の中にあって顧みられることのない闇の存在に、彼は同情し惹き付けられるようになった。同時に、地獄の炎の恐怖に怯えるジェーンの苦痛に充ちた憂い顔と不吉な黒衣の姿は、ハーンにとって忌むべきキリスト教の恐るべき化身であり、不幸の身の上の自分をさらに追いつめ、不吉をもたらす憎むべき存在として、彼はその存在の消滅を願った。

ハーンは彼女に関する奇怪な霊的体験をする。彼女の青白い顔のない亡霊に遭遇したのである。その後本当にカズン・ジェーンが肺炎で死亡する。誰にも言えぬこの不思議な霊的体験は、その後の彼の異界や霊界に対する探究心を形成し、不可知なものに対する畏怖の念を深める契機となった。ハーンによれば、死者への恐怖、亡霊に対する恐れは、太古の昔から人間の心の内奥に潜む生命の根源的恐怖である。生前は共に親交を深めた愛すべき人達が、死を境として恐怖の対象となり、昔ともに談笑しあった人の死体は、生きる者を脅かし憎悪しているかのように迫ってくる。このような死や闇夜に対する名状しがたい恐怖は、人類が太古の昔から何世代にも渡って遺伝子の中に伝え残してきたものであり、ハーンは亡霊や幽霊などの異界に対する探究に一種の信仰のような情熱を抱き夢中になった。ギリシアやローマの神話の神々も彼にとってはキリスト教にかわる大事な信仰の対象であった。

このように、夜の暗黒の恐怖や闇の世界の思考は、その後、ハーンの霊的な神秘への直観的洞察力を開眼させ、異教の神の信仰を抱かせるに至った。人が眼を背けてきた醜悪なものに、彼は倒錯的な審美感を把握し、弱者や少数者に偽りない真実の声を洞察して、悪魔や魔性のものに深い同情と敬意を覚えた。下層貧民社会のどん底生活の中で孤立無援の少数者としての辛酸をなめ尽くし、複雑な血統を受け継いだ混血児のハーンにとって、本当の真実や美は少数者によってのみ把握されて、多数者からは無視され憎まれてきたものであった。自然界の具象の背後に不可視の存在を見つめるハーンの心眼には、多くの亡霊や幽霊の異界があざやかに見えていたのであり、来日後の彼は中国や日本の宗教の輪廻転生や死者の世界の信仰に何の抵抗もなく親近感を覚えた。光輝燦然とした霞に解け合う海と空の蜃気楼や幻影は、彼の不可視なものへの想像力を喚起する。霊魂の超自然性や超絶性に対する彼の考察は、中国の神仙思想における想像上の仙境蓬莱を取り上げてその霊妙な大気に集中している。不老不死の蓬莱では死者をも蘇らせる不思議な草が生えている。彼は霊魂の不滅性や神秘性を次のように描写している。

「この大気はわれわれ人間の時代のものでなく、途方もなく古い時代のものだ ― その古さは考えようとすると空恐ろしくなるほどだ ― それは窒素と酸素の混合物なぞではない。要するに空気ではなくて、霊気から成り立っているのだ。― 幾億万回となく生と死とを繰り返してきた霊魂の精気が混じり合って一つの巨大な透明体となったものだ ― そうした霊魂を持っていた人々は、私たちとは似ても似つかない考え方でものを考えた。どんな人間でもその大気を呼吸すれば、自分の血の中にこれらの霊気の顫動を取り入れることができる。これらの霊魂はその人の感覚を変えてしまう ― 時空の観念が改まり ― その人は、それらの霊魂の見たようにしかものを見ず、感じたようにしかものを感じず、考えたようにしかものを考えなくなるのである。」[4]

蓬莱では人は老いることも微笑みが絶えることもない。その住人は小さな椀で食し、小さな杯で酒を飲む。このような古い伝説が伝える魔力は、遠い昔の死者の希望した魅力に他ならない。このような蓬莱の霊妙な大気は、日本の水墨画の山水に吹き渡る明るい雲を連想させる。その山水画の微かな霊気の中にハーンは蓬莱を読みとる。あらあゆる蜃気楼に幻影に不可視な超自然を感知し、遠い過去からの消えつつある伝言を看取して、その時空間を超絶した夢幻の境地を彼は芸術的表現に具現化しようとした。

日本時代のハーンにとって、神秘的な夕日や夏の青い海、寂れた墓地、小さな虫や鳥、民話や怪談、弱小のものや消え去った過去、さらに、忘却の彼方の不可思議な異界への探求心は、今まで以上に旺盛なものとなった。このような異界に対する長年に渡る心血を注いだ彼の研鑽が、晩年の傑作『怪談』を生み出す独自の素養となった。しかし、彼は単に怪談の作家であるだけではなく、異界への鋭敏な探究力や洞察力から、優れた日本理解や異文化探訪の作家として大成するに至った。すなわち、従来の外国人のような傍観者的な姿勢で、日本人の心や伝統文化を上から見下ろす西洋至上主義者の態度ではなく、異界を眺める時に鍛えた精緻な観察力と想像力によって、彼は日本人の生活の中に容易に入り込んで、日本人の目線で眺めて、西欧の読者に日本の庶民の姿を色鮮やかに紹介したのである。

さらに、ハーンは父と子と聖霊の名において、というキリスト教の祈祷の中の、聖霊、すなわちホーリー・ゴーストという言葉に異様な関心を抱いた。また、聖母マリアとイエスの聖母子像は、生別した永遠の母と自分のよ

うな切実な印象を与えた。このように、ハーンはキリスト教に反発し背を向けると同時に、異端的な興味と関心の対象として捉えたのであった。元来隻眼で弱視であったため朧なものや不可視な存在に対する幻想癖を募らせて、彼は亡霊や幽霊の実在を信じ、宗教ではむしろ正統な信仰心よりは、不可思議な霊的側面や不可知な異界、不気味なオカルト現象に異様な関心を抱き、既に7才頃から後年の世界観の萌芽を持っていた。

遠い昔の宗教的認識における神の存在、聖なるもの、不思議な神秘などすべては、古代人によって霊的（ゴーストリー）の一語で説明された。聖霊や霊魂について語ることは、亡霊について語ることであり、宗教的な知識はすべて霊的なものであった。神という概念は古代人の亡霊の存在に対する原始的信仰から発展したものであり、ゴーストは至高の存在たる神に用いられるようになっていた。後年、ハーンは芸術作品における霊的要素の重要性に関する文学講義に中で、ゴーストリー、すなわち霊的なるものについて次のような解説している。このような文学講義におけるハーンの論考は、芸術作品の本質に霊的要素を指摘した卓見であり、豊かな含蓄の形而上的認識を示している。

「今日、宗教上、神の、聖なる、不思議な、と称されるものはすべて、古代アングロ・サクソン人には、霊的（ゴーストリー）の一語をもって充分に説明されていたのだった。彼らは、人間の精霊や霊魂について語る代わりに、亡霊（ゴースト）について語った。そして宗教的な知識に関わるものはすべて霊的（ゴーストリー）と呼んだ。現在、カトリックの告解のさいに唱えられる決まり文句は、およそ二千年の間、ほとんど変化していないが、その中で神父は必ず、霊なる父よと呼びかけられる ― それは神父の仕事が、父親のように人々の霊ないし魂の面倒を見ることにあるからである。告解をおこなう者は神父に語りかけるとき、実際にわが霊の父よと言う。それゆえこのゴーストリーという形容詞に、事実非常に大きな意味が付与されていることがわかるわけである。それは超自然に関するあらゆるものを意味する。キリスト教徒にとってはそれは、神自身をさえ意味する。というのは生命の付与者は、英語ではつねに聖霊（ホーリー・ゴースト）と呼ばれるからである。」(5)

神という概念は亡霊の存在を信じた原始宗教の信仰から生まれたのであり、ゴースト（亡霊）という言葉にはこの世のものならぬ厳粛な響きがある。また、この様な感覚を抱けば、物質的実体が本質的には霊的なものであり、人間それぞれが不可思議な一個の霊に他ならないという認識を生む。さらに、宇宙の神秘性も霊的なものであり、あらゆる偉大な芸術はこの宇宙の霊的謎を人間に想起させ、人間の内奥の無限なるものに触れさせるのである。したがって、偉大な芸術作品が与える感動は、人間が亡霊や神を見たときの異様な戦慄に似ているのである。どれ程、科学的知識が増大しても、超自然的内容の文学芸術は依然として歓迎され、霊的なものの真理の不滅性を物語るのである。

（4）霊的宇宙としての海

温暖な気候で澄み切った紺碧の海と空に囲まれたギリシアのイオニア諸島のサンタ・モウラ島、すなわち現在のレフカス島で1850年にハーンはギリシア人を母として生まれた。アイオニア諸島は歴史的にギリシアとローマの文化の融合する地域であったばかりでなく、その島民達にはアラブや東洋の血が混じっていたと考えられている。遠い昔の伝説に満ちた土地柄であり、幻想的なロマンスに彩られた人々の住む地域である。紺碧の空と海に憧れるハーンの熱帯志向は、幼児期に過ごしたギリシアの島での原体験と深い関係がある。そして、ハーンは常に自分の母方の先祖に東洋人の血を意識していた。ギリシアとローマの文化的融合の歴史に曝されたこの島の特性は、民族的遺伝子となって、絶えず相対的価値観を見失わないハーンのコスモポリタン的風貌や心理構造に受け継がれている。宍道湖や中海に囲まれた松江や雄大な海岸の隠岐の島を見た時、原体験としての幻想的なギリシアの島の記憶が鮮やかに甦り、運命的な出会いを意識した彼は、東京在住時でさえ永住の地として隠岐の島を希望したのである。

特に、ハーンの海や島に対する熱い思い入れは非常に深いものがあった。来日後、熊本時代にハーンは隠岐の島を外国人として最初に訪問した。日本海に浮かぶ隠岐の島は、彼にとってギリシアの島を思わせ、漂白する孤独な魂を慰めた。文明から隔離された島では松江よりも古風な風習が残り、綺麗な風景と純朴な村民が彼を心から魅了した。後に東京の都会生活に疲弊したハーンに、理想郷としての松江が念頭に浮かんだが、隠岐の島はさらに想像力に強く訴えかけ、彼は隠岐の島での永住を夢に見ていた。

明治30年の夏、ハーンは静岡の焼津に行き、漁師山口乙吉宅の二階に逗留する。彼は焼津の海も乙吉の人柄も気に入り、明治32年にも再訪する。その後毎年35年までと37年にも、彼はお気に入りとなった焼津の海を訪れている。晩年に神の村だとまで絶賛した焼津は、旧日本の面影を求める彼の求道者的精神にとって、松江や隠岐島のビジョンと密接に結びついている。祈願が成就したら片目の達磨に眼を黒く塗り入れる習慣は、隻眼の彼の心を魅了し、屈託なく彼に挨拶をする村の漁師も農夫も、彼にとってお伽の国の無垢な住人のようであった。彼は大都会東京の生活の悶々たるストレスを発散させるかのように、焼津の海と村人に夢中になった。また、荒くて深い太平洋の海は、水泳の得意な彼を惹き付けて離さなかった。水泳の得意なハーンは、波に浮かんで葉巻をくゆらせたりしながら、いつまでも水の中で遊んでいた。熱帯と紺碧の海は、ギリシアの島に生まれた彼の

生涯を貫く重要なイメージである。生誕の地ギリシアの島の絶壁と輝く海という彼の原体験を追究する旅は、ニューオーリンズの海と帆船、マルティニーク島の太陽と青い海、富士山を背景に帆船が集う横浜港、江ノ島、焼津、松江の宍道湖と中海、日の御碕海岸、隠岐の島などを次々と訪れる求道者的漂泊となり、自らのアイデンティティを模索する魂の渇望の癒しを求めるものであった。奇妙なもの、異質なもの、異国のもの、不可思議なものといった未知の領域への探求も、因襲の支配に反発して真実を追い求めるハーンの求道者的側面を物語っている。このような意味において、彼は人生に対して実験的で挑戦的な態度を維持し続けるロマン主義者であった。人生と文学の根元的ビジョンとして、これらの海に纏わる土地は彼に大きな力を与え、彼の作品に不思議な個性と普遍性をもたらした。海はハーンの想像力の源泉となり、幼少期の霊的体験と共に、異界の神秘を探究するロマン主義的心情を育んだ。遙か彼方の海と空を憧憬する彼の性癖は、常に現状の満足よりも未知への変化を求め、異文化や異界に対する強い関心を抱かせることになった。

人生の辛酸を舐め尽くすような不遇な時代に、心の慰めとなった異界や霊界への情熱的探究は、海のビジョンとしての霊的宇宙との交感を求めて昇華する求道者的なハーンの文学思想の基盤となった。「焼津にて」は海のビジョンとしての霊的宇宙との交感を見事に表現したハーン晩年の傑作であり、彼の究極的な芸術観を示す散文詩と言える。漁港、大型漁船、お盆の灯籠流しの幽玄さ、海の神聖な神秘、このような漁村の情景からの考察と瞑想の中で、霊的宇宙の存在が究極的領域として示される。繊細な筆致で人間の生と死を独自の想念で見つめ、時折諧謔も交えながら、彼は霊的宇宙の壮大な真理を表現しようとした。海のビジョンから人間の魂の根源を霊的宇宙に求めたハーンは、黒人霊歌や民族舞踏、門付けの歌や童謡などのあらゆる音声や言葉に、霊的魂の表現を看取した非凡な想像力の持ち主であった。焼津の漁村や入り江の荒磯を賛美し、雄大な紺碧の海と怒濤の波に感嘆し、彼は遙か彼方の霊峰富士山に畏怖の念を抱いた。古来の伝統を守りながら、村全体が共同体意識で協力しあう焼津の漁村で、ハーンは哀感を帯びた漁民の素朴な歌に旧日本の美質や遠い神話の世界を垣間見る。西洋を模倣して近代化する新日本には目もくれずに、無邪気で無心の庶民の素朴な心で、先祖からの神仏の教えを素直に守り続ける村人達は、彼にとって正に創世記の民であり、古き日本の神話の世界の人達であった。灯籠流しが死者との別れの儀式であることに深い感銘を覚えたハーンは、明かりを放ちながら海へ流れ去る灯籠を眼で追い、闇の中に消えていく様子を、無明の世界へ放浪する魂であるかのように感じ、異様な感銘を抱く。闇夜に燃えながら消えていく灯籠の姿は、異界や霊界を示唆しながらも悲哀に満ちて不気味であり、漆黒の海は危険で戦慄すべき死の世界を暗示した。

怒濤の海原を見て、また大海の潮鳴りを聞いて、人は皆厳粛な気持ちになる。大海を眼前にすると、誰でも瞑想的気分に浸るものだ。うねる海の眺めと波の音が、この世の一切の煩いを忘れさせる。しかし、昼間の海よりも闇夜の海は、不気味な意識を備えた不可知な存在として人に漠然とした恐れの感情を与える。

「燐光で青く明るい夜に海水のきらめき又くすぶる明暗がどんなに生き生きと見えることか！燐光の冷たい炎の色の微妙な変化がどんなに或る種の爬虫類を思い出させることか！　そういう夜の海にもぐってごらん。濃い青色をした薄暗がりの中で眼をあけて、あなたの泳ぐからだの動きにつれて数えきれない光の微粒が異様にほとばしるのを御覧なさい。海水を通して見るその光の点は一つ一つ目をあけたり閉じたりするように明滅する。そういう瞬間には、私たちは何か馬鹿でかい感覚体にすっぽり包まれたような気がする。それはどの部分も万遍なく、触れて感じ、見てとり、意志を動かす一種の生き物で、その得体の知れぬ軟らかく冷たい霊体（ゴースト）の中で私が宙に浮いているという感じなのだ。」(6)

闇夜の海の音から受ける漠然とした恐れの感情は、何万年も何十万年もの昔から先祖代々我々の遺伝子の中に伝えられてきた無数の恐れの総和に他ならない。海の音は人間に畏怖の念と厳粛な気分を与え、深い瞑想にふけさせる。太古からの恐れの感情は、不可視な霊的存在の海の深淵に呼応する。海には大霊が充満し、その深い深淵は我々の魂の根源でもある。

太陽の下で光り輝く海は怒濤の波を見せて気高いが、闇夜の海は無明の世界の不気味さを露わにする。霊的宇宙の諸相を示す海のビジョンを凝視するハーンは、怒濤の波に霊的な命と意志を看破し、海に宇宙の魂を感じて、太古から無数に続いてきた命の感覚に霊的な想像力をかき立てられた。幼年期に見聞したギリシアの海の淡い原体験を想起し、母性としての海に魅了されていたハーンは、神秘的な波の豊かなふくらみに感動した。

厳しい環境の中で生存競争を生き延びてきた遠い祖先の恐怖心が、何世代にもわたって伝達してきた人類の遺伝的精神に浸透して、人間は海の崇高な壮大さに感動すると同時に、海の不気味さに戦慄する。個我を超越し包含する広大な宇宙的規模の存在としての海との霊的交感をハーンは信じた。海の怒濤に対する崇高と恐怖の反対感情併存は、祖先達の厳しい苦難の歴史と厳粛な命の継承の重厚な響きを伝えている。海の怒濤は太古からの人間の喜怒哀楽の響きでもあり、崇高と恐怖の海は怒濤の波音の音楽性によって、魔法のように心をかき立て、太古の歴史の神秘と悲哀のすべての記憶を彼に呼び起こす。人間の苦悩と恐怖の記憶は、悲哀を奏でる海の波の崇高な音楽で感情的に救われる。海を凝視するハーンは、怒濤の波に霊的宇宙の魂を感知する。彼にとって、神の似像としての人間は、神の奏でる音楽としての人生を歩む。人間の泣き声も笑い声も喜怒哀楽の叫びも祈りも全

て、神にとって見事な調和の音楽に他ならない。何世代にも渡って伝達された人間の悲哀の調べの歴史こそ、神の音楽の最も偉大な旋律として昇華したものであり、無限の過去の喜怒哀楽の総和として人々に感動を与えるのである。

精神的遍歴を続けるハーンの漂泊する魂にとって、海のビジョンとしての霊的宇宙との交感とは、このような海との宇宙的な出会いに霊的想像力の究極的領域を見出すことであった。幼少年期のギリシアの海の原体験の幻影とその後の実人生の海に纏わるあらゆる経験の総和が、彼の求道者的精神の中で人類の歴史的な記憶の広大な総体と呼応する。スペンサーの進化論の思想に影響を受けた彼は、人類の先祖の無数の死の総和として現在する命に対する畏敬の念と共に、海のビジョンの中に彼独自の有機的宇宙観を構築する。さらに、独自の神秘的ロマン主義の立場から、日本の自己犠牲的愛や無私の集団的意識、芸術的審美感と宗教的神聖との高尚な結合、善と悪を超越した不思議な民話や神話の世界などを彼は考察した。また、東西の文化的融合の可能性を模索する中で、キリスト教と仏教などを宇宙的視野から捉えて、彼は人類の精神史における歴史的変遷に対する宗教的考察を深めたのである。

(5) 新旧日本の相克、松江から熊本

チェンバレンの英訳『古事記』やパーシバル・ローエルの『極東の魂』によって日本への関心を深めていたハーンは、1890年3月、ハーパー社の特派員としてニューヨークを出発し、さらにバンクーバーから横浜まで17日間の船旅の後、夢の国日本に到着する。はじめて超然とした富士山を眼にし、小さな白い帆船の群れ、飛び交う海鳥を見て感激し、日本を彼の漂泊する人生の終焉の地にしようとまで思った。彼は日本との出会いを宿命的なものとして受け止め、すでに自分の霊が1000年もの昔から存在していた所という強烈な帰属意識を持つ。しかし、明治23年4月横浜に上陸すると、同行取材の画家ウェルドンの俸給が自分よりもはるかに多く、絵に付け足しの記事を不利な条件で求められている事が明確な事実として判明すると、ハーンは怒り心頭に発し、後先を考えずハーパー社と絶縁してしまう。経済的苦境に陥ったハーンは、早速友人ビスランドの紹介状を持って横浜グランド・ホテルの社長ミッチェル・マクドナルドに会い、就職の世話を頼むことになる。マクドナルドから紹介してもらった東京帝大のチェンバレン教授を通じて、以前ニューオーリンズ万国博覧会ですでに旧知であった文部省の官吏服部一三に再会し、その斡旋で松江尋常中学校の英語教師の職を得る。

松江に赴任するまでにハーンは横浜や鎌倉などを巡り、ビスランドに日本の印象を興奮気味で書き送っている。ハーンは東京から姫路まで汽車に乗り、さらに人力車で津山経由で山陰へ出て、途中下市で盆踊りを見ている。天真爛漫な日本人は世界でも類を見ない無垢な人々として彼に深い感銘を与え、日本の信仰、風習、歌謡、衣装、家屋などに心からの親近感を覚え、その欠点までも受け止め、西洋人よりは日本人として生まれたかったと感激の心境を吐露している。神秘的な夢の国日本はハーンにとって、マルティニーク島の楽園よりもはるかに魅力的であった。純粋無垢な日本人の無心の姿は、利己的な個人主義と過激な競争社会の西欧的価値観を逆転させるような別世界であり、集団のために自己抑制や自己犠牲を優先するすべての言動が、麗しい美徳の国の住人として彼を深く感銘させた。

明治23年8月30日に彼は松江に着き、9月2日に松江尋常中学校に初出勤した。教育勅語の奉読の模様や明治日本の教育の功罪を「英語教師の日記から」に記述し、ハーンは当時の若者の精神状態を克明に記録している。献身的にハーンの世話をした小泉せつを伴侶にしたことは、松江での幸福な家庭生活と日本永住を決定的にし、貞淑な日本女性に信頼しうる心の拠り所を得て、母性への思慕と畏敬の念は夫人への愛によって具体的なものとして結実する。結婚問題は彼に国籍を意識させ、家庭を維持し権利や財産を保持するために、婿養子として日本に帰化して日本国籍を獲得し、妻や子供を昔の自分のような不幸に陥らせないことを彼は願った。

ハーンは宍道湖のある松江を故郷のギリシアのレフカス島のように終生思慕し、ヘルンさんと敬愛してくれた素朴で温厚な松江の人々を愛していた。松江で伴侶を見いだしたことも松江に深い縁を彼に感じさせることになり、神社仏閣の多い松江で仏像や地蔵を眺めたり、子供達の無邪気に遊ぶ姿を見ては愉しんでいた。特に松江の風物の中でも、日本独自の音の美しさに彼は非常に敏感であり、聴覚をはじめとする五感で、古き日本の伝統に何とか触れようとした気概が、次のような一節からも伝わってくる。

> 「柏手を打つ音は鳴り止んで、一日の骨の折れる営みが始まる。橋を渡って行き来する下駄の音が一層かしましくなる。大橋を渡る下駄の響きほど忘れ難いものはない。足速で、楽しくて、音楽的で、大舞踏会の音響にも似ている。そう言えば、それは実際に舞踏そのものだ。人々は皆がみな爪先で歩いている。朝の日差しを受けた橋の上を無数の足がちらちら動くさまは驚くべき眺めである。それらの足はすべて小さくて均斉がとれていて、ギリシアの瓶に描かれた人物の足のように軽やかである。」(7)

既に結婚して家庭を持ったハーンは、さらに、小泉家の親戚縁者も扶養する義務を負っていた。全てを託して信頼する家族の存在は、孤独な漂泊の日々を送っていた彼にとって、新たな生き甲斐であった。どんな辛い仕事があっても、自分を頼ってくれる人々と守るべき家庭の存在は、彼の心に精神的安定を与えた。松江藩の士族であった小泉家の古風な習慣や作法に触れて、ハーンは旧

日本の世界に安らぎと小さな幸せを感じていた。彼を唯一頼りとし、常に細やかな気遣いを示してくれる人々の微笑や穏和な表情に、彼は絶えず自分の良心に訴えかけてくる責任と義務を感じ取っていた。ハーンが笑うと家の者が皆呼応するように笑い、彼が不機嫌だと家内の者全てが心配して息を潜め沈黙した。幼年期より肉親の縁に恵まれなかったハーンにとって、相互に信頼し合う生命的な人間関係は、かけがえのない家族の家庭という小世界であった。

明治26年11月に長男一雄が誕生すると、既に小泉家の親戚縁者の扶養義務を一身に担っていたハーンは、さらに父親としての責任を痛感する。幼少年期からアメリカ時代にかけて、孤独な漂泊の人生を送ってきた彼にとって、家庭の温もりのある古風な大家族制の生活は、日本の家の概念や人間関係を体験する絶好の機会となった。大家族を扶養するという厳粛な事実が、彼に道徳的義務感を与え、一家の主としての自覚と責任感が、最も日本に精通した西洋人になることを可能にした。さらに、子供の誕生は彼の家族に対する使命感や扶養の責任感を一層強固なものにした。両親の離婚後の父親の冷たい仕打ちで味わった幼年期の不遇の日々とその後の艱難辛苦の半生を思い返す時、ハーンは女子供を虐待したり見捨てたりする非道な男の存在には、世の中全体が暗くなる程の強烈な義憤に駆られるのであった。小泉家の養子として日本に帰化した後は、家族への愛の精神と家長的使命感を自覚し、彼は献身的奉仕を強く意識する。家族に対する責任を果たすために、アメリカ時代のような漂泊する人生とは決別し、自分を信頼する人のために働くことを無上の喜びとして、彼は家族のために献身的に全力を尽くすのである。日本の家族を守るために、ハーンは日本に住み着き帰化して、小泉八雲の日本名を名乗った。混血のハーンは多種多様の文化構造を遺伝子的に受け継ぎ、複雑な生まれ育ちを経験し、体内に繊細で過敏な精神を有する人物であった。このような特異な精神を有する彼は、日本をこよなく愛した稀有な西洋人であり、西洋至上の先入観にとらわれることなく、西洋と東洋を絶妙なバランス感覚で捉え、日本文化研究に関する一連の著書を精緻な文体で書き記すことができたのである。

松江の冬の酷寒に閉口する彼の熱帯志向は、彼の思想や感情のギリシア的でラテン的な資質と深く関わっている。また、妻の親族までも扶養する義務を負ったこともあり、彼は再びチェンバレンの世話で給与が倍で、気候も温暖の熊本第五高等中学校に転勤することになる。

小さな蒸気船で松江を去るハーンのために、約200人の生徒達が彼の家の前に集まり船着き場まで見送った。その他多くの友人、知人、関係者達がすでに船着き場に集結していたという。県知事は送別の辞を言付け、師範学校の校長はお別れの握手をしに駆けつけていた。彼はこのような人の優しさや暖かさをいままで味わったことがなかった。皮肉にも、ハーンは松江を去るにあたって、いかに失うものが多いかを思い知るのである。

ハーンは次の港で下船して、山越えで広島へ向かうことになっていた。尋常中学校の校長、師範学校と尋常中学校の数名の先生達、そして生徒一名までが親切にも次の港まで一緒に乗船して見送ってくれたのである。冬の冷気に包まれて、この別れの朝に松江の町を船上で見納めるにあたって、橋のかかった風情のある大橋川、鏡のような水面、奇妙に懐かしい古びた町並み、朝日を受けて輝く小舟の帆、夢のような美しい松江の姿と幽玄なる山並みに接し、彼は次のように夢幻の世界の記述を残して、失ったものの大きさを後に感嘆したのであった。

「この国の魅力は実に魔法のようだ。本当に神々の在す国さながら、不思議に人を惹きつける。色彩の霊妙な美しさ、雪に溶け込む山々の姿の美しさ、とりわけ、山の頂を空中に漂うかに見せる、あの長くたなびく霞の裾の美しさといったらない。空と地とが不思議に混ざり合っていて、現実と幻が見分け難い国 ― すべてが、今にも消えていく蜃気楼のように思われる国。そしてこの私にとっては、それはまさに永遠に消え去ろうとしているのだ。」(8)

見送りの制服の列からは別れの悲しみの喘ぎがもれ、それから万歳、万歳の声が聞こえ、段々と遠ざかり微かに聞こえるだけになってしまう。この時、懐かしい親切な人々の顔も声も、船着き場も、大橋川と大橋も、すべてが返らぬ思い出になってしまったのである。松江城の天守、松江の居宅の美しい庭、遠くに聳える神々しい大山、湖水に写る月光、数え切れないほどの鮮やかな楽しい記憶の数々が、悲しいほどの美しい思い出となって後にハーンの胸によみがえっていた。彼は神々の国と自ら賞賛した土地から遠くへ離れていったのである。

明治24年11月から3年間、ハーンは熊本第五高等中学校に勤めたが、西洋追随の近代化と軍備増強に邁進する軍都熊本に、醜悪な新日本の現状を見て苦しむことになる。彼は松江で同僚だった西田宛の書簡で松江を懐かしむように熊本を非難した。

「この都市は私がかって滞在したことのある都市の中でもっともおもしろくない都市です。とてつもなく長い通りに卑小な家が建ち並ぶ ― 立派な寺院や神社はなく、松江に比較してもほとんど寺院がありません。その場所全体が薄暗く、むさ苦しい様相を呈しています。」(9)

学校の雰囲気にも彼は随分不満であったが、敬愛する加納治五郎校長や漢文教師の秋月篤胤、そして教え子の村川や黒坂などがいたので救いであった。熊本の冬も予想以上に寒かったので、西田や教え子の大谷に厳しい寒気に失望したと手紙に失意の心境を吐露している。古風な松江の繊細で優美な土地柄に対して、熊本は質実剛健で殺伐たる軍都であった。松江で見た柔和で古風な旧日本は遠く消え去り、近代化を急ぐ新日本の現実を彼は目撃する。酒を飲み喧嘩をする気の荒い熊本人を見て、穏

和で天使のように無垢な日本人を賞賛し深く感銘した松江時代を、すべて幻想と錯覚であったと彼は自虐的に自戒した。彼は熊本のあらゆる面に反発して、新旧日本の矛盾と相克に苦しんだ。心からの共感と同情で感情移入して日本への認識を深めていたハーンは、旧日本の松江の母性的原理と新日本の熊本の男性的原理の対立に苦悩した。彼は熊本を日本で最も醜い不愉快な都会だと断定し、不毛の都市化で西洋式の軍都に変貌しようとしていると批判した。また、古風な九州人の気風は、近代化の洗礼を受けて軍国主義一色に染まっていると難じた。穏やかな好奇心で丁寧にハーンを扱った松江人に反して、熊本人は親切心よりは男らしさを尊び、近代化で合理主義が発達し、すでに西洋の学問にも通じていたため、外国人に特に敬意を払ったり、興味を示したりしなかった。彼は心から歓迎を受けた松江とは随分違った冷淡な扱いを受けたのである。

近代化と機械化に邁進する軍都熊本の現状に加えて、さらに、熊本第五高等中学校は松江尋常中学校とは異なって大きな教育工場のようで、先生と生徒は親密な有機的関係で結ばれず、軍隊式に事務的な授業が進められ、学校の運営も規則に縛られ無機的に処理されていた。このような西洋追随の教育は旧日本の独創性や円熟した伝統文化を枯渇させ、西洋を模倣し自国文化を否定する皮相な新日本の人間を生みだした。人々は萎縮し日本の過去の歴史と尊厳を見失い、子供か少年のように西洋に追随する幼稚で哀れな矮小化した存在となった。

古風な旧日本の人々は、狭い経験と無教育にもかかわらず、豊かな感性に満ち遙かに立派な独自性を有する姿を示していた。ハーンは常にその独創的な思考に啓発された。これに反して西洋模倣の高等教育を受けた多くの人々は、自分自身の意見や思考力を喪失し、出世競争の詰め込み教育に知性はすっかり疲弊し萎縮していた。学校の教師も学生達も自分本来の意見を持たず、無味乾燥の不毛の議論しかできないのに、西洋かぶれの自惚れだけは強く、しかも、西洋の学問を全て征服したので、愚鈍な従僕のような外国人には何の敬意の必要もないと思っていた。その矛盾に充ちた欺瞞と傲慢の姿に、ハーンは困惑し憤懣を吐露している。松江の旧日本と熊本の新日本の対立に直面して、ハーンは孤独と苦悩の中でさまざまな矛盾と葛藤を味わう。しかし、この苦渋の沈思黙考の時期を通じて、彼の日本理解は豊かな実りを見せる。新日本と旧日本の矛盾と相克に苦悶するハーンの葛藤は、理想と現実の狭間にあって思索がさらに深まっていく契機ともなった。単なる感情的なロマンティストではなく、彼は理想と現実の相克に苦悩しながら、熊本を嫌悪し周囲からの疎外感の中にあって、独自の強靱な思索力で新たな境地を見出していく。熊本の新日本や知識人を嫌悪しながらも、農民や商人は粗野だが素朴な正直者が多く、醜悪な新日本の背後にも旧日本の美点が失われずに残っていることに彼は気づく。

「日本人の生活のあのたぐいまれなる美しさ、世界の諸他国のそれとはおよそ趣を異にしているあの美しさは、おなじ日本人のなかでも、そういうヨーロッパかぶれのした上層階級のなかには見いだされないのである。これはどこの国でも同じことだが、日本のうちでも、この国の国民的美徳を代表している一般大衆 ―つまり、こんにちなお自分たちの固有の美しい習俗になずみ、絵のように美しい着物を身にまとい、そして仏の御身影やら神ぜせりに、かれら固有の、あわれにも麗しい先祖崇拝の心を牢として固く守りつづけている大衆のなかに、それは見いだされるのである。」(10)

近代化の病弊は熊本第五高等中学校の先生や知識人に多く見られ、一般庶民は松江と同じく揺るぎない日本人の美質を失わず保持していた。知識人の新日本に対して一般庶民の旧日本という図式の中で、詩人気質のハーンは大人の老獪さよりも子供の純真な心情に心惹かれ、西洋かぶれの知的インテリよりは、社会の底辺に木の根のように大地に足をつけた大衆の思想や行動に共感を覚えた。彼にとって、一般庶民が社会の幹や根であれば、教養ある少数の指導者達は見せかけの虚偽の花にすぎない。西洋思想に洗脳され古来の日本文化を排斥する知識人が、功利主義や個人主義を標榜して、新日本の利己的な価値観に支配されているのに対して、旧日本の古風な日本人の思想と行動は、無我で私利私欲なしで義務に滅私奉仕し、社会のためや家族のためには、自己抑制することを厭わない倫理道徳を実践するものである。物質的に貧しい庶民ほど精神世界が豊かで生き生きした感性を保持し、社会的地位も高く教養に恵まれたインテリほど、硬直した観念に縛られた非生命的な精神と利己主義を露呈しているとハーンは嘆いた。彼にとって西洋文明は悪徳であり、日本文化が非西洋であるほど道徳的に優れていた。したがって、本来の日本人は利他的な善行を積み、無益な利己心や競争心を抑制する高尚な道徳心を身に付けているので、西洋文明を導入しなくても、儒教精神に基づいた理想的な国家を樹立できると彼は考えた。旧日本が既に精神的には西洋文明よりは遙かに進んでいるにもかかわらず、西洋文明の悪徳を模倣しようとする明治日本の現状にハーンは危惧の念を抱いた。

没我によって調和の精神を実践する高尚な道徳の国旧日本は、西洋に対する科学的後進性にもかかわらず、逆説的に西洋に優る日本古来の独自の理念を維持していた。道徳的精神において日本は西洋よりも遙かに優れているとハーンは考えていた。しかし、日本古来の伝統文化が西洋の個人主義や物質主義の過剰と共に崩壊に瀕し、明治維新以降に導入された西洋式の教育は欧化政策を急激に押し進め、自国文化を自嘲的に批判しては自虐的に否定する風潮を生んだ。自国文化を卑下する心が、古来からの旧日本の高尚な倫理観を蝕み、学生達から清純な微笑みは消え去り、自国文化を卑しめて西洋式教育を受容し、自らは西欧思想を制覇したと勘違いする自己欺瞞と傲慢に起因する虚偽と不遜の姿勢が、当時の若者や知識人の心に増幅していた。

熊本でこのような新旧日本の対立に接したハーンは、熊本の教師や生徒の気難しい無愛想と慇懃無礼な態度に対して不満を抱き憤懣を吐露した。熊本に転勤しても尚手紙をくれる天真爛漫な松江の生徒に対して、年長の熊本の学生は画一的で個性が無く、卒業して東京に行く場合でも先生に挨拶に来ることもない。西洋の列強に対抗して軍備増強に急ぐ熊本では、外人嫌いをはっきりと口にする程、外人排斥の気運があった。学生達に英作文を書かせても、世論に支配されて自分の意見や独創的な説を発表できず、自発的に問題提起する能力もないとハーンは難じた。しかし、日本の西洋追随に反対していたハーンは、むしろ排外思想に賛成であり、日本人が古来の高尚な精神を尊重して自主独立の必要性に目覚めるなら、日本の英語教育の廃止さえ支持するとまで断言した。

「いったい、東洋の学生に、西洋の学生の平均能力以上の学科を課そうとしたり、英語を自分の国の国語、乃至は第二国語にしようとしたり、あるいは、こういう訓練によって、父祖伝来の感じ方、考え方を、もっとよいものに改良しようとしたり..... というような物の考え方は、じつに無謀な考え方であった。日本は、どこまでも、自国の精神を発展させて行かなければ駄目だ。異国の精神などを、借りものにしてはいけない。 ..... 日本の国民全体に英語を学ばせるなどは、ほとんど乱暴にちかいことであった。(いったい、英語という国語は、「権利」については、いろいろ説教を説くくせに、「義務」については、いっこうに説くことをしない国民の国語である。)」[11]

文部省の英語政策は大変な労力にもかかわらず、道徳的感情の崩壊に役立つのみであると批判する一方で、英語導入の影響がある意味においては全くの無駄骨ではなく、日本語の語彙を豊かにして柔軟さを加え、新たな思想の表現形式を生む可能性をも彼は指摘している。理想と現実の乖離に混乱した教育現場や軍国主義台頭の世相を憂慮したハーンは、常に日本の将来を真摯に危惧していた。しかし、厳しく批判した学生達からハーンは彼等の信頼を得ていた。学生を厳しく批判しても決して嫌悪の対象とはしなかった彼は、指導者としての公正な姿勢を常に維持していた。学生達も当時の外人排斥の風潮にあっても、教師としての彼の存在に強い信頼を寄せていた。ハーンは元来感情の起伏が激しく、好き嫌いの感情に支配されがちであったが、指導者としては学生の身の上を心から心配し、日本への深い愛情を若い学生達に傾注する献身的な優れた教師であった。熊本の近代化に失望しても、日本の文化に対する畏敬の念は失われず、日本の未来を懸念するハーンの熱意は熊本の学生達にも伝わっていた。

西洋追随の近代化に走る日本を嫌悪したが、彼は優れた日本人の資質に日本の明るい将来の展望を期待した。好き嫌いだけの感情に支配されて、新旧の日本の対立を単に傍観者的に見るのではなく、彼は日本の真の理解者として苦悩し、日本の自立のための根本的解決を模索する異文化理解者の立場を堅持していた。西洋と日本の文化的対立について様々な考察を残したハーンは、単なる主観的な感情に溺れることなく、また豊かな思索を枯渇させることもなく、両者の理想的な融合の実現を常に心に描いていた。日本の近代化を嫌悪しながら、近代化の歴史的必然性を認めていた彼は、決して日本の現状を傍観者的に冷たく否定したのではなく、矛盾的対立の和解を求めて真摯な考察を続けていた。

柔術の技に見られる俊敏な英知に基づく柔軟な折衷主義で、日本人は単なる模倣に終始しない独自の文化構築を必ず成し遂げるとハーンは力説する。次の様に彼は日本に全幅の信頼をよせて、楽観的な希望的観測をすることもあった。

「要するに、日本は、西洋の工業、応用化学、あるいは経済面、財政面、法制面の経験が代表するものの粋を選んで、これを自国に採用したといえば、それで足りる。しかも日本は、どんなばあいにも、西洋における最高の成績のみを利用し、そうしていったん手に入れたものを、自国の必要にうまく適合するように、いろいろ形を変えたり、あんばいしたりしたのである。」[12]

熊本の失意と幻滅の3年間は、実はハーンの日本論や比較文化的思想の構築にとって、収穫の多い充実した思索の時期であった。養子縁組、帰化、大家族の扶養、子供の誕生などを通じて、ハーンは日本の家庭を自己体験で知り、庶民生活から日本独自の文化の理解を深めた。教師としても県立の松江尋常中学校だけでなく、国立の熊本第五高等中学校にも勤務することになり、県の教育界、国の教育官僚、政府の指導方針などの文部行政に直接触れて、日本の教育界全体を展望できる立場にあった。また、国際関係では日清・日露の大戦の動乱に接して、彼は軍国主義と国家的ナショナリズムの台頭に日本の危うい将来像を予見し深刻に危惧した。

明治27年の日清戦争勃発で日本は世界中の注目を浴たが、ハーンは熊本の講演会で、「極東の将来」と題して時局を論じ、戦争ではなく科学産業の競争力でのみ日本の将来が開けると説いた。特に東洋で西洋に対抗してうち勝つ国は、日本と中国だと看破し、さらに中国が世界の大国になることを予見していた。しかし、日本が古風で質素な生活や健全で真面目な道徳観を放棄すれば、日本崩壊の危機が必ず訪れると警告している。ハーンにとって、日本の第一印象は小さな妖精の国であり、人も物も小さく風変わりで神秘を湛えていた。したがって、比類無い文化を持つ日本人は、小さくとも素朴で簡素な生活を守り贅沢をしないかぎり、独自の強さを発揮して西洋に対抗しうると彼は考えた。質素倹約の美徳を保持せずに、西洋の物質文明に溺れ贅沢に暮らすようになれば、国力の低下と道徳の堕落を招来するが故に、簡素で知的な生活に必要な範囲の事物のみで満足することが、

国力の増強と国民の幸福に資するところ大であると彼は力説した。しかし、西洋追随思想によって、富国強兵の軍国主義にひた走る明治日本は、あまりにも背伸びしすぎ、自分を実際より大きく見せることに夢中であった。お伽と妖精の国は、日清・日露の戦争へと突入し勝利する軍事大国の道を走り続け、文民統制を喪失し悲劇的結末へと向かうことになる。このように、現実の諸問題に対する精密な観察と洞察力から極東の将来を予見したハーンは、100年以上も前に日本の軍国主義の壊滅的な末路とその後の精神的退廃や物質主義謳歌を予言し、そして来るべき中国の台頭を警告していた。さらに、彼は日本の時局から単に時事問題に止まらずに、日本の未来の深刻な精神的病理や破滅的な文化崩壊の危機をも懸念していた。

(6) 日本論の探究、神戸から東京

明治27年11月に敬愛していた加納校長が他校へ転任し、自分の契約期間も満了するため、ついに馴染めなかった熊本第五高等中学校の教師を退職して、ハーンは神戸クロニクルの記者として勤めることになった。苛酷な授業の負担から解放され、新聞に社説を自由に執筆することで、彼は作家活動に集中しようとした。ハーンが熊本で目撃した近代化の激動と教育の形骸化は、時局の動乱や混乱への苦悩の考察と共に、日本研究に対する彼の思索を深めさせた。常に批判し警告を発し続けた彼自身の精神的軋轢の原因であった新旧日本の対立は、西洋を模倣し追随する新日本を鋭く批判する独自の日本論を生み出した。熊本、神戸から東京帝大の講師を経て人生の最後に至るまで、彼は一貫して日本の硬直した官僚組織の不見識な教育方針を糾弾し、日本の将来を憂うという反体制的な立場を堅持していた。日本の知識人には儀礼的で冷淡な者が多く、本来あるべき一切の素朴な人間的交流を不可能にしている現状を彼は熊本で体験していた。彼の批判は緻密さと辛辣さを加え、特に官僚の非人間的な思考は、組織の歯車として立身出世競争にのみ専念している利己的自我を露呈していると非難した。野蛮な西洋人にも劣る堕落した役人達は、常に利己的栄達のみを念頭に置き、官僚としての昇格のためには手段を選ばない非道の輩に他ならなかった。すなわち、野蛮な西洋人が心底に善良な人間的要素を残すのに対して、利己的な立身出世と保身のために不道徳の限りを尽くす日本の役人達は亡国の徒であった。悪徳に満ちたエリート官僚を大量に生み出す不毛な教育組織をハーンは熊本での教員生活で自ら目撃していた。西洋追随を標榜する明治政府の近代化の方針は、日本古来の精神文化を無視した皮相な西洋模倣でしかなく、堅実な成果のない鍍金であり、根本的な教育理念を喪失していた。教育の不毛性は国家の理念喪失に他ならず、近代日本の行く末の暗雲を暗示していた。新日本の教育が産出したエリート官僚や西洋かぶれの知識人たちは、日本の心を見失った利己的打算に終始する忘恩の徒でもあった。ハーンは当時の誰よりも日本のアイデンティティと近代化の問題、古来の伝統文化と西洋思想の相克を切迫した国家存亡の課題として受け止め、明治の時代精神の病弊を深刻に考察していた。

このように、ハーンは伝統文化を排斥するような日本の近代化に異論を唱え、西洋模倣の教育が産出するエリートに利己主義と精神的堕落を看破し、名もなき庶民には西洋人に負けない立派な資質を認めた。庶民の素朴な感情や思考に日本の美点である無私協同の道徳倫理を認め、彼は日本古来の精神的支柱の源泉を探究しようと努めた。素朴な無名の庶民に西洋人の何倍もの人間の尊厳を感じ、その立派な紳士然たる資質と木訥な話しぶりに高い精神性を看破して彼は感嘆した。ハーンは旧日本が新日本に蝕まれて消滅していく惨状を目撃して、如何に西洋文明が醜悪な影響力と暴力的破壊を発揮するかを痛感した。庶民が歌う民謡や童謡に心からの同情と共感を覚えて、日本人の清純な精神世界に感嘆したが、彼は軍歌には何の興味も持たなかった。集団主義的日本にむしろ国民的個性を認め、その驚嘆すべき滅私の清浄な力を強調する一方で、西洋の個人主義は利己的な自己中心主義を奨励する社会悪であると彼は断定した。人間のエゴを醜悪なまでに追求し、弱肉強食の競争原理に支配された西洋物質文明に反して、日本古来の国民感情は自己犠牲と崇高な倫理観において他に比類ないもので、この上もなく麗しい人間的特質だとハーンは激賞した。

日本の素朴な民衆の中に西洋を凌ぐ高度な倫理観を見出したハーンは、腐敗したキリスト教社会や近代産業の非人間的な機械主義を糾弾したが、むしろ西洋社会から失われた真実のキリスト教的愛や自己犠牲的愛が、日本人の日常生活に現存することを認識した。さらに、何の打算もなしに行われる無償の行為に示された日本人の無私の感情に、彼は心から共鳴し、西洋文明社会が到達し得なかった倫理的感情と繊細な日本の美意識の根源を解明しようとしたのである。

神戸クロニクルの社説でも、日本の物質的国力は西欧に劣るが、精神世界の優れた美点を保持すれば、国家的危機において列強に優るとも劣らない力を発揮するとハーンは力説した。日清戦争に勝利したのは西洋の科学や軍備の導入の成果ではなく、日本古来の集団主義的な国民性の威力によると彼は看破した。集団に奉仕するために自己を滅却して没我的献身に傾倒する国民的感情は、西洋の利己的な個人主義に対峙する日本独自の高邁な精神主義であり、世界に誇るべき道徳だと賞賛して彼は強く魅了されていた。近代西洋文明模倣の悪弊として日本社会を蝕んだ物質至上主義や拝金主義、立身出世主義や利己主義、過激な弱肉強食の生存競争、廃仏毀釈と倫理の衰退、このような様々な病弊が西欧的価値観の浸透と共に、旧日本の繊細な道徳感情を枯渇させ、今なお、現代日本の根底を揺さぶる重大な問題であり続けている。西洋文明はあらゆる点で日本的な価値観と正反対の価値観を基盤に置いており、日本古来の精髄とは隔絶した世界である。西洋文明が日本にどれ程の改革の苦痛を

強い、どのような脅威を与えうるかを考え、ハーンはその巨大な文明の利己的な打算のメカニズムを憎んだ。西洋文明の実利的などん欲さ、残酷な偽善の巨大な体制、非情な弱肉強食の冨の傲慢さを彼は心から憎んだ。

「西洋文明の真に崇高なる所産はもっぱら知的なものであった。それは純粋なる知識の峻険なる氷の高峰であった。そしてその永遠の雪線の下に埋もれて感情面での理想はみな死に絶えてしまったのである。仁慈と義務とに重きを置く日本古来の文明は、その固有の幸福理解や、その徳義を実現しようとする意志、その巾の広い信仰や、その歓喜に似た勇気、その素朴さや飾り気のなさ、その足を知る心、その己を空しうする心などにおいて間違いなく類を絶して秀れたものであった。西洋の優越性は倫理的なものではなかった。西洋の優越性は算えきれないほどの苦難を経て発達した知性の力に存するのであり、その知力の力は強者が弱者を破壊するために用いられてきたのである。」(13)

西洋文明によって日本は新たな活動様式を学び、新たな思想を会得しなければならなかった。日本は列強諸国に対抗して生き延びるために、必要に迫られて西洋の科学技術文明を修得し、西洋文明から多くを取り入れねばならない境遇にあった。しかし、自国古来の善悪の観念、義務や名誉の観念などの最良のものは保存し、西洋文明の物質主義の浪費性や快楽主義に対しては断固として拒否する態度をとるべきであった。日本独自の折衷主義がどの程度、西洋かぶれの欧米至上主義を押しとどめ、自国文化のアイデンティティを保持し得たかは、現在日本の国のあり方の根幹に触れる重大な問題となっている。明治維新以来、日本は自国文化を排斥して全面的に西洋化を受容することによって、近代化を促進しアジアで唯一西欧の列強諸国に対峙しうる国家となった。しかし、日本の欧化政策は、中国や韓国が自国文化に固執して日本ほど西洋化を推し進めなかったのとは対照的であった。西洋化によって軍国主義国家として近隣諸国に侵略し、日清・日露の大戦に勝利して後、大東亜共栄圏の名の下にアジア諸国を西欧の植民地化から解放しようとした第二次世界大戦で日本は破滅的大敗を喫した。戦後アメリカの駐留軍の庇護の下で物質的繁栄を極め、経済大国と称された日本には何か国としての重要な理念が今なお欠落しているのである。

外国人居留地であった神戸は、何処よりも西欧の風俗習慣を模倣し、西洋風の建築物などで賑わっていた。近代西欧の悪徳を露骨に顕示する新日本の醜悪さに直面したハーンは、熊本以上に神戸を忌み嫌った。下品で横柄な西洋人が、上品ぶった英米風の流行を神戸で蔓延させている事に彼は不愉快な思いを募らせていた。物静かな日本婦人の控えめな物腰や穏やかな声に、日本女性の美徳と豊かな母性を感じ取ったハーンにとって、居留地に出没する気取った西洋の女性の尊大な身振りや自己顕示のポーズは、西洋の優越感を誇示するもので非常に気に障るものであった。旧日本の古風な文化や風物を愛するハーンは、急速に西洋化する新日本の姿を示すもの、すなわち、ピアノ、カーテン、教会、洋館、洋服などを大いに嫌悪し、日本古来の美徳や文化を破壊する西洋文明の醜悪さに義憤を感じていた。

日本女性の心の美質、日本人自身が見過ごしている平凡な日常性の中の美徳、近代化の中で捨て去ろうとしている日本古来の洗練された審美意識と道徳感情、愛と美の理念としての神道と仏教の和合などにハーンは心からの共感をもって接した。日本の日常的習慣や家庭の躾けの観察に止まらず、アメリカ時代に身に付けた新聞記者の取材方法を活用して、彼は社会の底辺に生きる名もなき人々の生態に迫り、芸者や旅芸人の悲哀を描いて無名の庶民の人生を把握しようと努めた。母性への憧憬、下層階級への共感、そして独自の審美的感性によって、ハーンはキリスト教や西洋至上主義に束縛されずに、神道や仏教の本質を究めようと宗教的考察を深め、単なる通俗性や時事性を超越した日本の普遍的な価値を捉え表現しようとしたのである。

素朴な庶民の生活に人間の魂の郷愁を感じ、消え去りつつある日本古来の文化に尊厳を鋭く感取したハーンとって、西洋文明の虚飾に充ちた贅沢品は、私利私欲の人間の欲望と偽善を露呈するものであった。神戸での生活体験は、彼に西洋と日本の歴史的相克をさらに真剣に考察する機会を与え、『心』、『仏の畑の落穂』などの優れた日本文化考察の著書を生むことになった。『心』の中の「趨勢一瞥」は西洋と日本の対立と和解を独自の弁証法的考察で論じた秀逸な作品となっている。

「民族的感情、感情的な差別、言語、風習、信仰の壁、これは何世紀たっても、超えがたいままにのこって行くようである。直観的に、おたがいに相手の気質を見抜くことができるような、例外的な人物相互の牽引から生ずる、温かい友愛の例もあることはあるけれども、だいたいにおいて、外国人が日本人を理解しないことは、日本人が外国人を理解しないのとおなじである。そのうえ、外国人にとって、誤解よりもさらに悪いことは、自分が乱入者の立場にあるという単純な事実である。普通のばあい、外人は、日本人とおなじ扱いを受けることは、とても望めない。これは、なにも外国人が余分な金が自由になるというためではなく、人種が違うためなのである。」(14)

神戸の外国人居留地は日本の中の西洋であり、海外へ行かなくても英米文化を見知る場所であったが、西洋人は傲慢な君主として不遜な振る舞いを傍若無人に行い、白人至上主義を体現するかのように、支配者として日本人を酷使し思いのままに冷徹な雇用をしていた。日本を支配できると過信した横柄な西洋人は日本を過小評価していた。傲慢な西洋人に義憤を覚えた憂国の日本人が自力を付けてくると、日本と西洋の双方に対立感情が生まれ、西洋の反日感情と日本の排外運動に火がつき、対立

と和解が緊急の課題として重要な政治問題になった。双方の利害対立は人種的反感と共に、根拠のない偏見と憎悪を生むに至った。民族的対立や偏見、言語や習慣の壁、宗教や文化の対立、このような西洋と日本の根本的葛藤の問題は、幾多の軋轢や戦争を経た明治から現代の平成に至っても、尚乗り越えられない深い溝となっている。例外的に個人間で温かい友情が生じる場合があるけれども、西洋が日本を理解できないのは、日本が西洋を本当には理解できないのと表裏一体の関係であり、両者は永遠に平行線を走りお互いに真に交わることがない。相互の異文化理解の至難さを力説する先覚者であったハーンは、表面的な妥協や友好を否定して、西洋の侵略と日本固有の文化の消滅という切迫した事態に対処するため、西洋の模倣ではなく日本人による自立国家樹立の可能性を模索した。西洋の支配から脱却するために、日本人の不撓不屈の努力による西洋至上主義思想の打破こそ、世界に誇る日本古来の姿を維持し確立することになると彼は力説した。

明治 28 年 12 月、ハーンに東京帝国大学の英文学講師の仕事の依頼が入った。熊本よりも近代化した神戸を嫌悪した彼が、東京を気に入る筈もなく躊躇していたが、翌年 1 月外山学長の熱心な説得で再び教職につく決意をして上京する。しかし、ハーンは東京帝大での授業の合間の休憩時間でも、大学構内で他の教授達と談笑することなく、三四郎池辺りを一人散策したり佇むことが多かったという。

ハーンは宣教師でもあった外国人教師達を嫌い、何か自分に不快な状況が訪れると、彼等の陰謀だと思いこむ誇大妄想と被害妄想に苦しみ、他人から誤解を受けやすい激しい気性の一面を持っていた。若い日の艱難辛苦があまりにも骨身にしみ込んでいたので、一旦猜疑心を抱くと思いこみの強い性格のために冷静な判断に欠ける場合もあった。アメリカ時代でも彼は多くの人と交友を持ちながら、些細なことで絶交し多くの敵を作って孤立した。眼科医のグールドなどは典型的な例で、交友関係の拗れからハーンを中傷誹謗する目的で本まで出版した。チェンバレンとは日本時代に親密なつき合いを続けて、教職の斡旋や日本研究などで彼は大変な世話になったが、日本やスペンサーに関する見解の相違から感情的に縺れて不和になり、和解することなく絶交した。チェンバレンも日本から英国に帰国して後、ハーンについて否定的な評価を残している。どの様な人間でも長所と欠点を表裏一体に合わせ持っているが、ハーンは思いこんだら人間関係を犠牲にしてでも自らの信念に生きる一徹者であった。

近代化した大都会の東京に彼は何の感銘も受けず、砂漠化した不毛の都会東京の生活には日本らしい所はまるでないと不満を抱く。新たな洋館と古風な和風の屋敷の併存、焼けるとすぐ建て替えられる小屋のような店と殺風景な兵舎、田畑と竹藪、工場と雑踏、停車場と歯ブラシのような電柱の列、地上にむき出しになった水道管と水のない貯水池、坂だらけでうねった大都会の地形、雨になるとすべてが泥だらけになる市街地、このような混沌とした当時の東京の不愉快な雰囲気の中で、詩的永遠を考えて文学的創作や哲学的考察を深めることなど不可能だとハーンは失望した。詩的精神を欠いた大都会東京の喧噪から逃れて、彼は焼津の海岸に安らぎの空間を求めた。

西洋化に邁進することによって近代化した東京は、新日本の文化の断片から成立した大都会であり、無機質な鉄とコンクリートの不毛の土地で、文学的情緒や審美的感性に訴えるものの何もない所であり、人間的な繋がりや有機的な生命を喪失していた。急激な西洋化の中で日本古来の伝統や美点は失われ、工場と雑踏だけの殺風景な大都会は、正にこの世の地獄ともいうべき混沌とした惨状であった。醜悪な近代産業社会に急変する新日本の激動の中にあって、ハーンはわずかに面影として残る微かな旧日本の懐に止まろうとした。日本の古い浮世絵に描かれた蜃気楼のような霞の中に、彼は古き良き日本の理想郷を求めた。

東京での生活では社交的なつき合いを極端に避け、彼は全てを犠牲にして著述活動に専念し、毎年のように著書を出した。東京帝大での多忙な講義を続けながら、『異国情緒と回想』『霊の国日本』『影』『日本雑記』『日本お伽噺』『骨董』『怪談』『日本』などの一連の日本研究の著書を彼は完成した。英文学講師としての業績に関しては、教え子の学生達によって筆記された膨大な講義内容が纏められ著書として死後出版された。来日以前でさえ、ハーンは既に人生の最良の時期を新聞社の奴隷となって無駄に浪費してしまったという強迫観念に苦しんでいた。今までの文学的蘊蓄や異文化探訪の取材と調査研究に基づく独自の創作手法によって、優れた文学的著作を残すという彼の使命感は、年齢と共にますます高まり、もうこれ以上貴重な時間を無駄にできないという決意を強めていた。命の続く限り著作活動に精励するという思いは、書くことへの執念となり、一日でも物を書かないと不安で苦痛を感じるまでに至った。このように、晩年に至って我を忘れて執筆に没頭するハーンは、社交を絶って自宅周囲の散歩以外はまったく外出しなくなり、文学的著作活動に殉教するかのような変人奇人に徹していた。

(7) 文学論の構築

東京帝大での文学講義は主に『文学の解釈』『詩の鑑賞』『人生と文学』に纏められているが、ハーンの文学研究者としての業績は、英米文学や日本文学の両方から高い歴史的評価を得ているわけではない。彼の作品も異文化探訪の紀行文や印象記、再話物語、日本論、東西比較文化論など多岐にわたるが、従来の文学作品の範疇から逸脱したものが多かったため、ジャンルの間隙のものとして正当な扱いを受けずに過小評価されてきた。文学作品の作家としては本格的な小説家でも詩人でもなく、英文

学講義においても専門家として高等教育を受けた研究者でも評論家でもなかったため、ディレッタント的側面が強調されて、彼を文学史のジャンルから締め出し、研究者としての業績を過小評価したり無視する傾向があった。したがって、従来の学問分野の研究者や学者というよりは、彼は最近注目されている東西の異文化交流史、比較文化学、比較文学の分野における先駆的作家として扱うべき存在であると言える。比較文化や比較文学は幅広い知識によって、宗教、教育、芸術、科学、経済、政治、哲学などの変遷を世界的視野における相互の影響関係において研究するもので、ハーンのような博識と豊富な人生体験を有し、従来の学問分野に固定されずに自由な思考様式を発揮して、様々な文化の実地調査研究に通じた人物を正当に評価するのに最適の学問分野である。

ハーンの文学講義を校正編纂したコロンビア大学のジョン・アースキン教授によれば、形式よりも内容において優れた精妙な構成の鑑賞と批評は、英文学史上コールリッジに匹敵する程の価値を有している。ハーンの文学講義の語り口は、文学的職人作家として口承文学やストーリーテラーの手法を活用したもので、教え子の厨川白村もその素晴らしい内容を絶賛し、また、矢野峰人は身近に創作現場に接するような感銘を得たと賞賛した。授業においてハーンは文学を情緒の表現として捉え、学生の想像力に訴えかけて作家や詩人の本質を分かりやすく説明しようとした。すなわち、文学の中心を情緒におき、人生体験の本質の総和的な再現と把握し、彼は門つけの旅芸人の語り部のような感動的な話術の口調や節回しに内包された魂の叫びを再現して学生に伝達しようと努めた。戦慄するような感動を与え、強烈な情緒を伝達する語り手として学生に対面し、彼は熟練した職人的技量と力量で人間の魂の声を再現し、語り部としての文学の特質や魅力を解説しようとした。

ハーンは「創作論」で芸術的技能の先天性を強調して、芸術家としての見識や熟練は他から教育されるものではなく、教育とは無縁に自発的に育成されるものであると断言している。教育によって大芸術家が生まれることはなく、芸術的天才は教育に関係なく偉大である。本を読んでも上手に楽器の演奏をしたり、綺麗な陶磁器を造れないように、詩や小説の書き方は教育以外のところで培われ、芸術的にものを眺める才能は教育とは無関係に育つ。

「教育が偉大な作家を生み出したことはない。これに反して、彼らは教育にもかかわらず偉大な作家となっている。なぜなら、教育の影響により、素朴で本能的な感情は必然的に弱められ、鈍らされることとなるが、この素朴で本能的な感情の上にこそ、情緒的な芸術の高度な側面が依拠しているからである。ほとんどの場合、知識は、ある非常に貴重な天性の能力を犠牲にしてのみ手に入れることができる。すべての知識を吸収しているにもかかわらず、精神と心が子供のように新鮮なままでいられる人こそ、文学において偉大な仕事をなしとげると思われる。」(15)

教育はむしろ芸術的技能を生み出す原始的で萌芽的な創造的感情を鈍らせ独創性を抹殺する。ハーンが力説する原始的な芸術的感情は、門つけの自然発声的な歌声の絶妙な節回しが喚起する感動に他ならない。門つけの歌や音楽や旋律は、人類の原始的な感情の自然発生的な表現が進化を遂げたもので、本質的には誰にも論理で教えられない人間の本能的な喜怒哀楽の自然な発露である。ハーンは自らの独学体験と実践的文学修業から、学校教育は芸術的創作とは無縁であると同時に有害でさえあると力説した。さらに、近代の合理主義に基づく指導要領による学習課程で導かれた学校教育は、単なる無機的な不毛の知識の蓄積にすぎないと彼は警告した。独創的な芸術家を形成する見識や想像力は、理性的頭脳による知識や知的分析を否定する独自の原理に従うのであり、門つけのような職人芸こそ芸術創作の原理の具現であった。三味線を抱えた器量の悪い女の醜く歪んだ唇から、ほとばしり出た奇跡のような、心にしみ込む深く優しい歌声に彼は大変感動する。巧みな三味線の扱い、不思議な魅力を秘めた深みのある声、このような吟遊詩人のような資質にハーンは非常に感激し、その女に精霊のような不可思議さを看取し、偉大な芸術家の存在を感知した。

「女が歌うにつれ、聞いている人々はそっとすすり泣きはじめた。私には詞はわからない。でも、日本の暮らしの中の悲しみや優しさや辛抱強さが彼女の声とともに心に伝わってくるのが感じられた。それは、目には見えぬ何かを追い求めるようなせつなさである。そこはかとない優しさが寄せてきてまわりで微かに波打っているようだった。そして忘れ去られた時と場所の感覚が、この世ならぬ感情と入り混じりつつ、ひそやかに蘇ってきた ― 今生の記憶の中には決してない時と場所の感覚が。この時、私は歌い手が盲目であることに気づいた。」(16)

ハーンが大いに感動した門つけの語り部の巧妙な節回しは、聞く者に魂の声として強烈な情緒と印象を伝達するが、それは単なる知識として教えられて得たものではなく、血肉となった生命的な知識として自然に習い覚えたものである。門つけはただの貧しい女であるにもかかわらず、素晴らしい技量の旅芸人であり、三味線も歌もどんな芸者も敵わない程の腕前で、しかも誰でも歌えるような気取らない調子で歌うことができたことにハーンは深い感銘を受けたのである。

この盲目の女の歌声が与える感動こそ、不可視なるものへの思慕の念を物語り、現世を超越した感情、個人的存在を超えた深い感情、今生の記憶の彼方に続く過去の人類の時間と場所の感覚を呼び起こす。死者は決して死に絶えたわけではなく、現在する人間の心の闇の中で眠っているのであり、このような忘れ去られた死者の過去を呼び起こすものこそ、ハーンにとって戦慄するよう

な芸術的感動であり、真に霊的（ゴーストリー）なものであった。不可思議な感動の喜びと痛みは、現在に生きている人間のものではなく、何世代もの過去の人間の感情であり、幾千万もの過去の忘れ去られた人間の記憶の反響である。

人間の原始的感情は遺伝子に潜んだ記憶に訴えかける人類の根元的な生命の叫びであり、門つけの職人芸は全身全霊による魂の素朴な伝達様式であり、唯一の真正なる肉体的表現手段である。ハーンの霊的芸術創作理論は、日本の伝統芸術に合致したもので、古来の語り部や話芸から民話や伝承物語に彼は強い関心を抱き、自ら再話物語の創作に傾倒するようになる。盲目の旅芸人が渾身の力を振り絞って表現する喜怒哀楽の歌や物語に彼が深い感銘を覚えたのは、極貧と文盲の身でありながらひたすら全身全霊で最上の語り部となって、皮相な知識を超越した真実の生命の叫びとしての感情表現を実践するからである。門つけの歌の話芸には独特の声のリズムが存在し、肉体と感情がリズムにおいて融合し、人間の喜怒哀楽が優れた語り部による生命的鼓動となって偉大な芸術的感情に昇華されているのである。

このような霊的芸術創作理論を応用して、ハーンは偉大な文学作品と対峙し、その創作の原点にまで遡り、作家や詩人の心理を読み取って作品の生命的本質を再現し伝達しようとする。ハーンの文学講義の特徴は、職人的作家の立場から作品を創作の原点から理解し鑑賞しようとする点である。彼にとって、文学は実地体験によってのみ習得し表現しうる妥協を許さない職人芸であり、文学に生命的感情を与え不朽の普遍性へと昇華させるのは、鍛え上げられた芸術的年季奉公による名工の職人芸そのものである。ハーンは自らが築き上げた職人的作家の体験と信念に基づいて東京帝大で講義し、同時に現役の作家として創作や批評を実践していた。彼は日本研究で得た理念や想念を抽象的概念に終わらせず、職人的なストーリーテリングの話芸による逸話や挿話に生かし、詩的想像力で生きたビジョンとして講義や作品に具現化したのである。彼の詩的散文や独特の話術はこのような職人的作家の芸術創作原理に基づいて、理念と形象が一体となって具体的作品や講義の中で生み出された。すなわち、見事な語り部の音楽的リズムや口調による話芸としての劇的効果や練り抜かれた表現を駆使して、見事な格調と統一の芸術的表現が詩的散文の世界や文学講義の世界に具現されたのである。西欧の理知主義や機械的合理主義から離反して、吟遊詩人の如く人々に普遍的感情を喚起して、魂の声を伝達する語り部の精神に基づいて、ハーンは人間の真実の姿や純粋無垢な心の叫びを鋭敏に感知し豊かな情緒で表現することが出来たのである。

大都会東京の喧噪の中ですべての交友を絶ち、隠遁生活の中で著述だけに専念していた晩年のハーンにとって、瘤寺の古木や焼津の海は心和む大切な場所であった。しかし、ハーンを招聘し支援してきた外山学長が明治33年に死去したことで、彼は大学での信頼すべき支柱を失うことになった。さらに、憩いの場であった近隣の瘤寺の樹木伐採に落胆して、明治35年に新たな環境を求めて彼は西大久保に転居した。住居の近くの瘤寺は、彼にとって格好の散歩道であったにもかかわらず、境内の三本の古い杉の巨木が、近代化の波の中で突然切り倒されたのである。経済的に困窮していた寺に財政的援助さえ申し出た彼は、願いむなしく古木が伐採されたことに怒り失望し、二度と散歩に出向くことなく新たな住環境を求めて西大久保に引っ越したのである。

さらに、明治36年1月文科大学長井上哲次郎はハーンに契約満了をもって解雇通知を送るが、7年近く献身的に奉職をした者を紙切れ一枚で首にする大学当局の非情さに彼は憤激した。来日以来長年にわたって日本を海外に紹介した著名な研究者・作家であり、熱心に学生の英文学研究を指導した優れた教育者でもあった功労者に対する不見識な非礼であったので、まもなく学生が騒ぎだし留任運動が起こった。学生のハーンに対する熱い敬愛の念は、大学当局の冷たい官僚主義とは対照的であった。ハーンの解雇については、他の外国人教師との確執が原因という説もあった。事態の収束のために大学関係者が留任を求め私邸を訪ねたが、一徹者の彼は懇願を拒否し大学との関係を断絶したのである。

東京帝大は思慮のない官僚主義的な事務処理によって、日本のために尽力した国家的功労者を背徳的に切り捨てたので、日本に対して海外からも国家的忘恩という非難が噴出した。この騒ぎを契機として著名な日本研究家としてのハーンに英米の大学から講演依頼もあったが、大学側の様々な事情で中止になった。講演原稿として準備していたものを著書に纏めようと決意し、健康万全とは言えない状況にもかかわらず、彼は全ての交友関係を絶って、晩年の大作『日本』の執筆に心血を注いで専念した。このように、彼は時間を惜しみ健康を犠牲にしてまで、一心に最晩年の労作の執筆に傾倒した。彼の日本研究の集大成とも言うべき大著で、まったくの助手もなしの研究と執筆は、彼の健康を損ね寿命を縮めた。祖先崇拝から古来の信仰形態を論じ、外来宗教との関係を考察し、封建制や精神史という歴史的眺望から現在を批判して未来を予測し、日本の本質を論究した彼の渾身の労作である。大作完成後、明治37年4月早稲田大学の招きに応じて再び彼は教壇に立つが、9月26日に狭心症で急逝し、54年の生涯を終えたのである。

特に、東京帝大を退職後、残り少ない寿命を自覚するかのように、彼は社交も義理のしがらみも絶ち、形式的なことや些末な雑事で貴重な著作活動が妨げられることを本能的に避けた。雑事や社交を絶ってのみ本当に執筆に専念できるのであり、孤独と静謐の心でのみ優れた作品が産出されるという信念を彼は実践しようとした。孤独な隠遁生活の中で残された課題を果たすべく、ハーンは日本研究の集大成としての最後の著作『日本』をあらゆる犠牲を払ってでも完成するという強い意志を抱いた。世俗から超然として、真剣に著作に専念した彼の姿勢には、自らの作家的宿命に殉ずる禁欲的求道者の気概が充満していた。また、肉親との縁薄く幼少期から辛酸

を舐めた苦労人の一徹な性格は、最晩年の孤立した境遇の中で被害妄想と誇大妄想の性癖を強めた。交友絶縁による対人関係の悪化は、彼の疎外感と猜疑心を一層強めたが、不安と怒りは逆説的に孤独な執筆への献身的努力に彼を駆り立てた。逆境に強いハーンは、常にひたむきに目標に向かう節度ある生活を信条としていた。東京での失意や悲哀の中で、東京帝大からの解雇や悪化する人間関係に憤怒の念を深めても、尚一層自らの永遠の日本の幻影に慰めを見出していた。彼はあらゆる苦難を乗り越えて、心の故郷としての旧日本を探究し、新日本を透徹した洞察力で批判した。日露戦争中の日本人は心労と悲哀にあっても、決して喜怒哀楽を表面に露骨に現さない奥ゆかしさを持っていた。人生の艱難辛苦を堪え忍んできたハーンにとって、このような日本人の自己抑制の姿は賞賛すべき優れた民族の特質として写った。肉親の戦死にも貧窮にも騒がず、国の勝利のために黙々と耐えて仕事に従事する日本人の姿は、集団に奉仕し自我を滅却する自己犠牲の精神を示しており、西洋の個人主義や利己主義に慣れたハーンにとって、注目すべき希有な特質であった。

日露戦争の勝利への代償に肉親を失った苦痛に耐える日本人の愛国心に感動したハーンは、陽気に振る舞う日本人の自己犠牲の精神を心から称えている。昔から、地震、火山、洪水、津波などの天変地異の災害に堪え忍んできた日本人は、戦争のあらゆる不幸にも冷静に対処する力を有していると彼はその忍耐力の根源を指摘した。日本古来の自己鍛錬や犠牲の精神を支える審美意識や道徳観は、醜悪な西洋の近代化の波を受けても決して失われずに残っていた。新日本に埋没し消滅しつつある旧日本の気高い精神風土を明確な著作として永遠に後世に書き残す使命感を彼は日本の誰よりも強く心に抱いていた。それは畏敬の念で作品化した国家愛、隣人愛、夫婦愛、親子愛などの人間愛の諸相であり、旧日本の社会に残る人間愛が永遠に不滅であるという切なる彼の祈りであり、日本民族の美的特質を欧米に知らせようとする彼の抱負の実現でもあった。

注

(1) 田部隆次『小泉八雲』(北星堂、昭和 25 年) p.175.
その他、ハーンの伝記的事実に関しては主に次の書物を参考にした。
E.スティーヴンスン『評伝ラフカディオ・ハーン』(恒文社、1984)
E.Stevenson, *Lafcadio Hearn* (1961, Macmillan)
(2) 小泉八雲『光は東方より』(講談社学術文庫、1999) p.309.
(3) 小泉八雲『明治日本の面影』(講談社学術文庫、1990) p.470.
(4) 同書、p.464.
(5)『ラフカディオ・ハーン著作集』第 7 巻(恒文社、1985) p.102.
(6) 小泉八雲『日本の心』(講談社学術文庫、1990) p.353.
(7) 小泉八雲『神々の国の首都』(講談社学術文庫、1990) pp.106-107.
(8) 同書、p.381.
(9)『ラフカディオ・ハーン著作集』第 14 巻(恒文社、1983) p.248.
cf. Lafcadio Hearn Life and Letters 2vols.
by Elizabeth Bisland (1908, Houghton Mifflin)
(10)『日本瞥見記』上巻(恒文社、1975) pp.5-6.
(11) 小泉八雲『心』(岩波文庫、1951) pp.147-48.
(12) 小泉八雲『東の国から・心』(恒文社、1975) p.206.
(13)『日本の心』p.178.
(14)『心』p.134.
(15)『ラフカディオ・ハーン著作集』第 9 巻(恒文社、1988) p.60.
(16)『光は東方より』p.115.